

精密成形技術のリーダー：株式会社 創美工芸のグローバルな軌跡

イノベーション、コラボレーション、そして卓越した製造技術の追求。



本社

1958年の創業以来、株式会社創美工芸は高精度な金型製造技術を駆使し、高品質な自動車部品の製造を支えてきただけでなく、電子機器、OA機器、自動車車体部品、車載機器用金属部品の設計・製造も手掛けてきた。

近年、多くの日系中小企業が海外進出を模索する中、「約18年の間に6つの海外工場を設立することができた」と大辻氏は振り返るように、創美工芸は1988年のタイ進

出を皮切りに、中国、フィリピン、ポーランドと次々と新たな市場へ足を踏み入れた。

「私たちのような企業がこれほどまでの海外進出を果たしたのは想像しがたいことでした。1988年当時、従業



創美工芸の製品

員はわずか200人。その規模で海外市場に挑むには、強い意志と勢いが必要であり、業界で生き残るためには海外進出が不可欠だったのです」と大辻氏は語る。

現在、創美工芸は世界中に数千人の従業員を擁し、成功の鍵は自社の強力な生産能力と多様な顧客ポートフォリオの構築にある。「これが我が社のコア・コンピタンスであり、他社との差別化」と大辻氏は強調する。

大辻氏が特に重視するのは、グループ内での知識共有である。革新的なアイデアが生まれ、共有される文化を築き上げてきたのだ。「情報や経験の共有を通じて、グループ全体の技術向上を推進しています。私たちの成長の原動力は、社員同士が競い合える小集団活動にあると考え、この取り組みはISOAP活動として社内では認知され、20年以上の歴史があります」

同社はファクトリーオートメーションとロボティクスの分野でも先駆者であり、2006年から中国での自動化生産ラインの導入を監督してきた実績を持つ。大辻氏自身も「この取り組みが成功したと確信しており、その成功が他の場所への拡大の理由となった」とは振り返る。

カーボンニュートラルの推進とともに、道路を走る電気自動車（EV）の需要が増加している。そのため、軽量かつ高性能な部品の製造の重要性が高まっている中、このような部品の金型や製造は、今後の創美工業の大きな課題となるだろう。

「現在、世界は電動化の方向へと進んでおり、EVの構造上、モーターは極めて重要な部品です。そのための超精密技術が不可欠であり、モーターのケース製造にも、こ



「コラボレーションの扉を開き、外国の企業を敵とせず、ライバルとして受け入れることで、相互の成長を実現し、グローバル市場での無限の可能性を解き放つことができる」

株式会社創美工芸 代表取締役社長 大辻 純生

の精密成形技術が必要とされます。私たちが有する成形



さまざまな商品を生産する創美工芸

技術がこの分野での要となるため、ここは特に狙っている分野です。データ収集と生



技術交流会

産の精度向上のため、測定機を導入し、この分野での自動化生産を確立しようと考えています」と大辻氏は語る。



新しいモノづくり(上)、モノづくりの技(下)



www.sohbikogei.jp